

富士宮市文化財調査報告書第3集

滝ノ上遺跡

— 県営畑地帯総合土地改良事業富士根地区
幹線第2号道路建設に伴う発掘調査報告 —

1 9 8 1

静岡県清水土地改良事務所
富士宮市教育委員会

富士宮市文化財調査報告書第3集

滝ノ上遺跡

— 県営畑地帯総合土地改良事業富士根地区
幹線第2号道路建設に伴う発掘調査報告 —

1 9 8 1

静岡県清水土地改良事務所
富士宮市教育委員会

序

文化財保護行政は、文化財保護法に基づき、文化財の保護・保存、さらにその活用を図り、地域の知的、文化的な生活環境の保全に努めてまいりました。

しかし、近年における地域開発の進展は文化財、とりわけ埋蔵文化財に対し、少なからざる影響を与えつつあります。現在この埋蔵文化財の取り扱いがもっとも大きな問題となっております。開発事業等の土地本来の利用との調整段階では、できる限り現状保存の方針で対処していますが、事業内容等により現状保存できないものに対しましては発掘調査を実施し、記録保存の措置をとっております。

富士根地区は長期計画に基づく富士根地区県営畑地帯総合開発事業が進められ、地域の産業振興に大きな期待と関心が寄せられています。

このたびの滝ノ上遺跡発掘調査は、その幹線第2号建設工事によるものであり、静岡県清水土地改良事務所の埋蔵文化財にむける積極的な深い御理解と御協力によって、昭和55年8月18日より約2ヶ月間にわたる発掘調査をすませ、10月18日無事その全てを完了いたしました。ここに本報告書を刊行し、多くの方々の御批判と御指導を承るとともに、この調査に直接、間接に御指導、御協力を賜りました。地元関係者の皆様をはじめ、静岡県清水土地改良事務所、静岡県教育委員会の関係各位の御理解と御協力に対しまして深く感謝と敬意を表する次第であります。

昭和56年3月

富士宮市教育長 塩川 隆 司

例 言

1. 本書は、昭和55年8月18日より10月18日まで、約2ヶ月間にわたって発掘調査が実施された静岡県富士宮市杉田字滝ノ上781番地他に所在する滝ノ上遺跡の調査報告書である。
2. 調査は、静岡県清水土地改良事務所からの委託を、富士宮市が受け、静岡県教育委員会の指導によって、現地の発掘調査を富士宮市教育委員会が実施した。
3. 測図、及び調査資料の整理は、富士宮市教育委員会技術員が主体として実施し、一部作業員の協力を得た。
4. 本書の執筆、及び編集は、渡井があたった。印刷、出版に関する事務は富士宮市教育委員会があたった。
5. 発掘調査による資料は全て富士宮市教育委員会に保管している。
6. 発掘調査体制は、次のとおりである。

調査主体者 塩川隆司（富士宮市教育長）

調査員 渡井一信（富士宮市教育委員会技術員）

調査補助 馬飼野行雄（富士宮市教育委員会技術員）

伊藤昌光（富士宮市教育委員会嘱託）

作業員 井出紀夫・木川知子・太田智子・吉野順子・松田恵子・伊藤邦江・佐野秋男・望月秀雄・友野勝・滝口たけ子・飯室久子・芦川美智子・中山民子・木下朋子・萩野良枝・杉田ます子・石川京子・渡辺正子・小野田良恵・渡辺剛江・大原初江・石川篤・田中徳代

事務局 諏訪重夫・佐野久雄・後藤章・渡辺孝秀（富士宮市教育委員会社会教育課）

目 次

序	
例 言	
I. 調査の経緯と経過	1
II. 遺跡の位置と環境	5
III. 土 層	6
IV. 遺 構	6
1. A地区	6
2. B地区	9
V. 遺 物	14
1. 土 器	14
2. 石 器	36
VI. 総 括	47
1. 遺構について	47
2. 遺物について	48
3. まとめ	48

挿 図 目 次

第1図 位置及び周辺の遺跡	1
第2図 周辺地形図	2
第3図 滝ノ上遺跡A地区全体図	3
第4図 滝ノ上遺跡B地区全体図	3
第5図 A地区第1・2・3号配石実測図	7
第6図 B地区第1号配石実測図	9
第7図 B地区第2号配石実測図	10
第8図 B地区第3号配石実測図	11
第9図 B地区第4号配石実測図	13
第10図 土器拓影(第1群土器)	15
第11図 土器拓影(第2群土器)①	16

第12圖	土器拓影(第2群土器)㉔	17
第13圖	土器拓影(第3群土器)①	19
第14圖	土器拓影(第3群土器)②	20
第15圖	土器拓影(第3群土器)③	21
第16圖	土器拓影(第3群土器)④	22
第17圖	土器拓影(第3群土器)⑤	25
第18圖	土器拓影(第3群土器)⑥	26
第19圖	土器拓影(第3群土器)⑦	27
第20圖	土器拓影(第3群土器)⑧	28
第21圖	土器拓影(第4群土器)	31
第22圖	土器実測図1)	32
第23圖	土器実測図2)	33
第24圖	土器実測図3)	34
第25圖	土器実測図4)	35
第26圖	石器実測図1)	37
第27圖	石器実測図2)	38
第28圖	石器実測図3)	39
第29圖	石器実測図4)	40
第30圖	石器実測図5)	42
第31圖	石器実測図6)	43
第32圖	石器実測図7)	44

挿表目次

第1表	出土遺物比較表	14
第2表	石器計測表	46

图版目次

- 图版第1 A. 航空写真
B. A地区前景
- 图版第2 A. A地区遗構全景(1)
B. A地区遗構全景(2)
- 图版第3 A. A地区第1号配石
B. A地区第2号配石
- 图版第4 A. A地区第3号配石
B. 施ノ上遺跡基本層序
- 图版第5 A. B地区前景
B. B地区遺構全景
- 图版第6 A. B地区第1・4号配石
B. B地区第1号配石榿石出土状况
- 图版第7 A. B地区第1号配石埋藏出土状况
B. B地区第1号配石完掘状况
- 图版第8 A. B地区第2号配石
B. B地区第2号配石半掘状况
- 图版第9 A. B地区第2号配石完掘状况
B. B地区A-7区土器出土状况
- 图版第10 A. B地区第3号配石(1)
B. B地区第3号配石(2)
- 图版第11 A. B地区第3号配石石棒(№52)出土状况
B. B地区第3号配石石棒(№55)出土状况
- 图版第12 A. B地区第3号配石凹石出土状况
B. B地区第3号配石砥石出土状况
- 图版第13 A. B地区第4号配石
B. B地区第4号配石半掘状况
- 图版第14 A. B地区第4号配石埋藏出土状况
B. B地区第4号配石完掘状况
- 图版第15 出土土器(1)
- 图版第16 出土土器(2)
- 图版第17 A. 第1群土器
B. 第2群土器①

- 图版第18 A. 第2群土器②
B. 第3群土器①
- 图版第19 A. 第3群土器②
B. 第3群土器③
- 图版第20 A. 第3群土器④
B. 第3群土器⑤
- 图版第21 A. 第3群土器⑥
B. 第3群土器⑦
- 图版第22 A. 第3群土器⑧
B. 第4群土器
- 图版第23 A. 把手①
B. 把手②
- 图版第24 出土石器①
- 图版第25 A. 出土石器②
B. 出土石器③
- 图版第26 A. 出土石器④
B. 出土石器⑤
- 图版第27 A. 出土石器⑥
B. 出土石器⑦

I 調査の経緯と経過

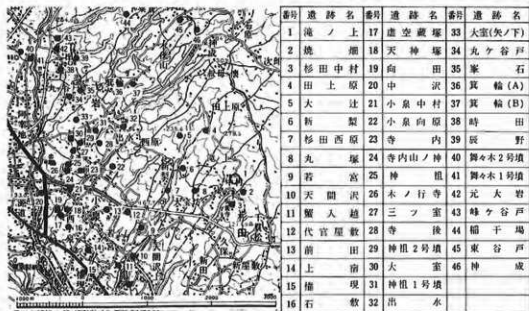
昭和54年9月、静岡県清水土地改良事務所より庵ノ上遺跡を東西に横断する形で、県営畑地帯総合土地改良事業富士根地区の幹線第2号道路を建設する計画について、富士宮市教育委員会に内報があり、事前に協議し、文化財の取扱いについて慎重に措置することが確認された。

昭和55年3月、清水土地改良事務所より市教育委員会に、富士宮市杉田庵ノ上の「埋蔵文化財の有無の確認調査について」の依頼があった。これに対し市教育委員会は、確認調査実施の時期について関係者と話合った結果、調査予定地内の茶の木の移植が完了する7月を待って実施することとした。

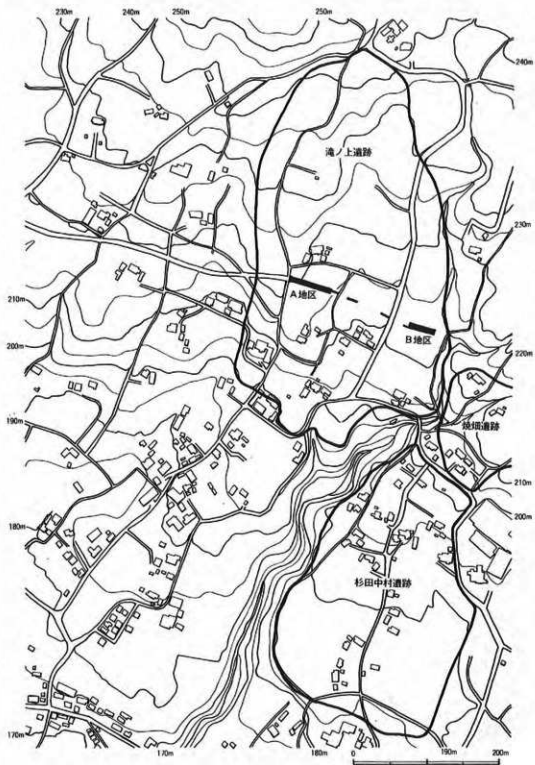
昭和55年7月、調査対象面積約1500㎡にトレンチ14本を設定し、確認調査を実施した。その結果、対象地内中央部をのぞく東側と西側に合わせて約400㎡に遺物包含層が残存していることが確認された。市教委ではこの結果を清水土地改良事務所に連絡するとともに、静岡県教育委員会文化課に報告し、充分なる発掘調査を実施して記録を作成することで合意をみた。

発掘調査は、清水土地改良事務所からの委託を富士宮市が受け、市教育委員会が調査にあたることになり、昭和55年8月12日付で契約が成立し、同8月18日より発掘調査を開始した。調査は、対象地西側をA地区、東側をB地区として進められた。

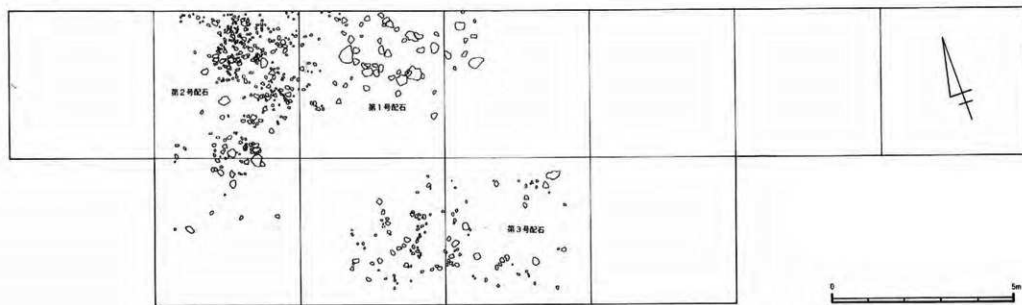
調査は、A・B地区とも4mのグリッドを設定して行なわれた。A地区は8月18日から開始し、配石遺構3基を確認して9月29日完了した。B地区は9月19日から開始し、配石基3基、環状配石1基を確認して10月18日まで行われた。B地区の調査完了とともに実質稼働日数41日にわたるすべての調査を完了した。



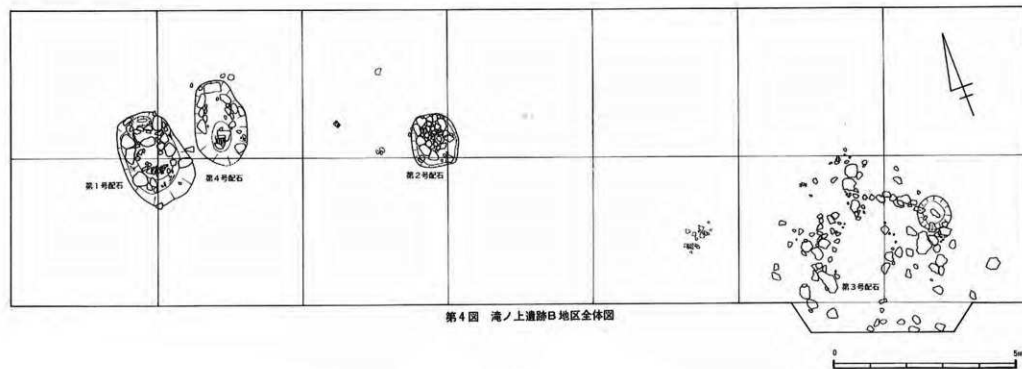
第1図 本遺跡の位置及び周辺の遺跡



第2図 周辺地形図



第3图 湾ノ上遺跡A地区全体図



第4图 湾ノ上遺跡B地区全体図

II 遺跡の位置と環境

滝ノ上遺跡は、富士宮市杉田字滝ノ上 781 番地の11他に所在する。身延線富士駅より東へ直線距離にして約 4 km の地点である。本遺跡は、富士山頂から連なる裾野斜面のほぼ末端部に位置し、東側の小河川は 100 m ほど南下した地点で滝を形成して天間沢と合流する。西は約 0.8 km で慈眼寺沢に接する。

地形的には、富士山西南麓に数多く分布する沖積世初頭の基底溶岩の一つである大湧溶岩流の東端に位置する標高 200～240 m を測る丘陵上に立地している。富士山西南麓は、洪積世末期の古富士火山の噴出した古富士集塊質泥流を基盤とし、新富士火山の噴出物がその上部を被っている。この大湧溶岩流は新富士火山の活動の最も初期にあたるもので、本遺跡の西側慈眼寺沢と東側天間沢の内側で窓状に古富士泥流を被い、その北側と東側において同じく新富士火山の噴出物である入山瀬溶岩流に被われている。大湧溶岩流と入山瀬溶岩流は、大湧溶岩流の方が若干古い、時代及び起源は、沖積世初頭の新富士火山の初期の活動によるものである。

本遺跡の立地する杉田地区は、その西側の小泉地区、大岩地区と共に富士根遺跡密集地帯として知られている。不透水性の強い、古富士集塊質泥流と上部層の透水性火山砂礫層の境界面が地下水帯水層であるため、湧水地が非常に多く、それとともない小谷・小丘を連続させている。そうした地形条件が遺跡を密集させる要因となっている。

周辺の遺跡に目を向けると、本遺跡の東側天間沢川をはきんで東側に、縄文時代早・中～後期の焼畑遺跡、南側に縄文時代中～後期の杉田中村遺跡がある。この杉田中村遺跡では土偶が出土したとされている。本遺跡と同じ、天間沢川と慈眼寺沢にはさまれた地区の中に立地する遺跡としては、縄文時代前・後期の杉田新梨遺跡、縄文時代中期の田上原遺跡・丸塚遺跡、縄文時代中期・古墳時代初頭の天間沢遺跡などがある。とくに、天間沢遺跡は富士市から連続する遺跡で、富士市においては過去 7 回にわたり発掘調査が実施され、縄文時代の住居址 14 棟、配石遺構 5 基、土城 50 数基、古墳時代初頭の住居址 1 棟などが確認されている。縄文時代中期の配石遺構は本遺跡 A 地区の配石遺構と同様に溶岩礫を使用している。

慈眼寺沢とその西側約 1 km の尾無沢の間には、縄文時代早期の若宮遺跡・杉田西原遺跡、縄文時代早・前期の代官屋敷遺跡、縄文時代中期の小泉向原遺跡・縄文時代中～後期の蟹入越遺跡などがある。若宮遺跡・代官屋敷遺跡は西富士道路建設に伴い発掘調査が実施されている。

尾無沢より西側で弓沢川とはさまれた地区をみると富士根遺跡密集地帯の中でもとくに遺跡の密集する地域がみついている。縄文時代早・中～後期の箕輪田遺跡・縄文時代中・後期の箕輪 A 遺跡など、20 数ヶ所の縄文時代遺跡が古墳 5 基と共に存在している。

この他では、本遺跡の南約 2 km の地点に、最近西富士道路建設工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査で確認された縄文時代中期の遺跡である天間第 3 地区遺跡（富士市入山瀬字長峰）と天間第 4 地区遺跡（富士市天間字並久保）がある。

Ⅲ 土 層

本遺跡の基本層序は、A地区・B地区とも次の通りである。

- I 表土層・耕作土
- II スコリア質土層・赤褐色の細かなスコリアからなる土層で、通称フジマサと呼ばれ、極端に硬くしまっている。
- III 黒褐色土層、スコリア粒子を多量に含む。縄文時代後期の包含層である。
- IV 暗褐色土層、本地域で栗色土層と呼ばれているもので、大粒のスコリア粒子を多量に含み、粘性がある。縄文時代中期の包含層である。
- V 黒色土層、富士黒土層に比定できるものであるが、スコリア粒子をほとんど含んでいない。縄文時代早・前期の包含層である。
- VI 褐色土層、V黒色土層とVII黄褐色土層の漸移帯である。
- VII 黄褐色土層、ローム層

以上が本遺跡の基本層序である。ここで各地区の遺構検出面にふれてみよう。A地区は東向きの斜面で、ほぼ基本層序通りであり、3基の配石遺構は、ともに暗褐色土層上面で確認されている。B地区は、東西40mの間のはば中央部が旧地形の谷部にあたるため、両端は土砂の流失が激しく、15cmほどの表土の下にすぐ褐色土があらわれる。このため、中央部で確認された、第2号配石をのぞいた3基の配石遺構は褐色土上面に構築されている。第2号配石は、暗褐色土層が包含層である。

Ⅳ 遺 構

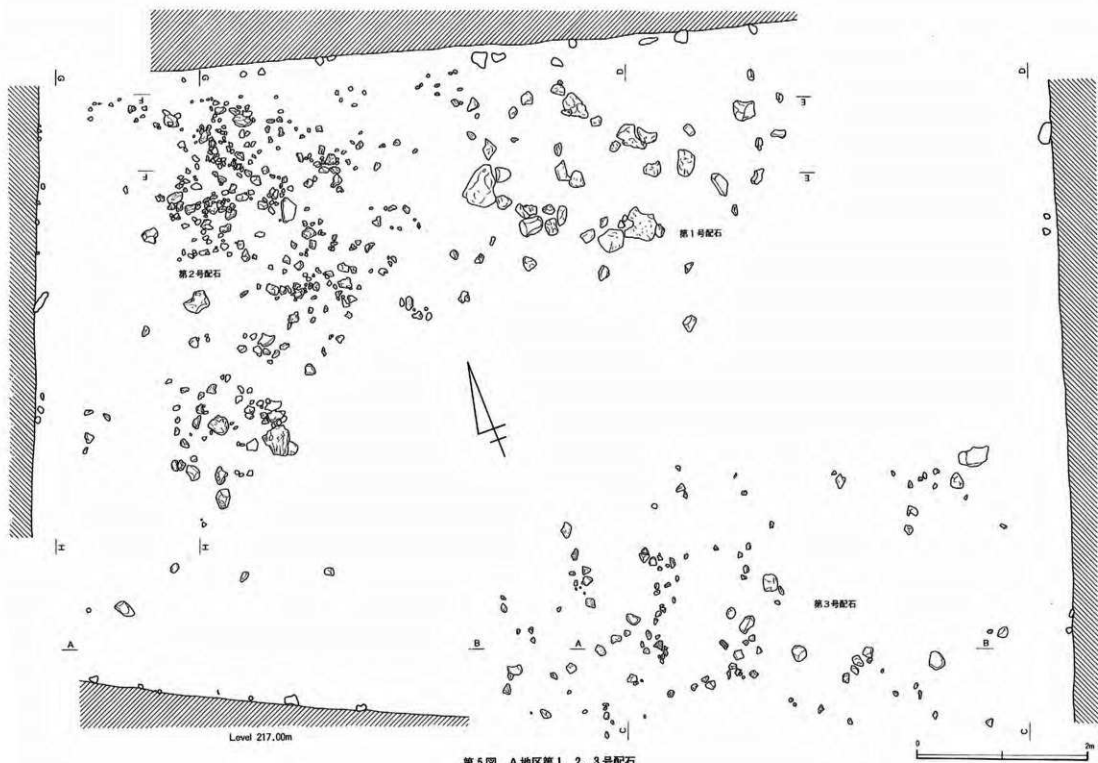
1. A地区

本地区からは縄文時代中期の配石遺構3基が発見された。

第1号配石 (第5図、図版第3-A)

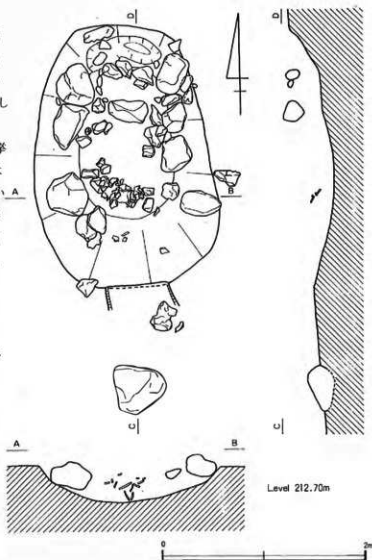
A-3、4グリッドの中央部から北側にかけて位置する配石で、北側は調査区域外にのびる状況である。調査区域内でみる平面形状は半円形を呈しており、その規模は4.5×2.5mである。配石に使用されている石は約60個程で、30~50cmぐらいの人頭大のものが10個ほど使用されているほかはすべて拳程度のものであった。隙は表面がザラザラした溶岩礫で河原石は一切使用されていない状況である。配石は、暗褐色土層上面に構築されている。検出された遺物としては、石皿2点(第30図、図版第24-2、5)、打製石斧1点(第27図、図版第26-B)と少量の土器片が出土している。

第2号配石 (第5図、図版第3-B)



第5图 A地区第1, 2, 3号配石

A-2、A-3、B-2グリッドにまたがり第1号配石の西隣りに空間をおかず位置する。長軸を南北に有する細長い扇形の平面形状を呈し規模は5×3mである。使用されている礎はほとんどが挙大以下のもので、その大半は小石とよんでさしつかえないものである。石材はやはり溶岩礎を使用している。構築面は、暗褐色土層上面である。検出された遺物としては石皿1点、(第30図、図版第24-3)、打製石斧5点、(第27図、図版第26-B)、凹石1点(第29図、図版第25-A)、石匙1点(第28図、図版第27-B)、磨石1点(第28図、図版第27-B)のほか、配石面確認された土器片1(数点出土している。



第3号配石

(第5図、

図版第4-A)

第6図 B地区第1号配石実測図

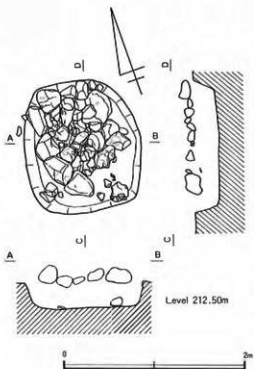
B-3、4グリッドで発見された。第1号配石の南側、第2号配石の東側にそれぞれ3mほど隔てて位置する。東西方向を長軸とする楕円形の平面形を呈している。規模は、3×6mである。使われている礎は、10~20cmはむもの数個を挙大以下の石約100個とからなって成り、溶岩礎を使用している。暗褐色土上面に構築されている。石皿1点(第30図、図版第24-1)が検出されている。

2. B地区

縄文時代中期~後期の配石遺構4基が発見されたこのうちの3基は配石基とよばれているのである。

第1号配石 (第6図、図版第6～7)

調査区域西側のA-1・2、B-1・2グリッドにまたがり発見された。その東側30cmには第4号配石がある。本配石は配石基とよばれるもので、上部に配石があり、下部に埋嚢を伴った土城をもつものである。南北方向に長軸を有しその方位はN-7°50'-Eを測る土城の規模は2.5×1.8mで深さは最深部で約40cmを測る楕円形の土城である。石は南向きに口を開いた馬蹄形を呈しておりや丸みをおびた溶岩礫と砂礫が使用されている。礫の大きさは、30～40cmほどの大きな礫7個と10～20cmくらいの礫30個ほどからなる。褐色土層上面に構築されている。遺物としては、浮子と思われる蜂石1点(第29図、図版25-A)と埋嚢として使用されていた縄文時代中期末葉の深鉢形土器(第23図、図版第15-11)が検出された。



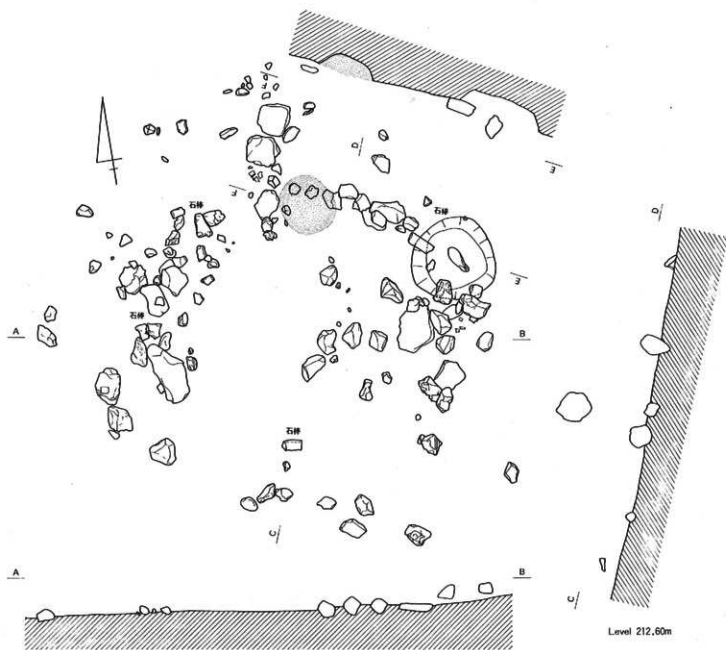
第7図 B地区第2号配石

第2号配石 (第7図、図版第8～9)

A-3、4、B-3、4グリッドにまたがり発見された。長軸方位はN-13°50'-Wである。土城内に埋嚢をもたないが、配石基とみてよいものであろう。土城の規模は1.8×1.5mを測り、20cmの深さをもつもので円形の土城である。上部の配石は円形を呈し、数十個の大小の礫により構築されている。配石に使われている礫は径30cm前後のものが数個で、内側にぎっしり詰まった10～20cmの礫を囲んで配されている。礫は丸みをおびた溶岩礫を使用している。配石は、暗褐色土層上面に構築されている。配石に伴い出土した遺物としては縄文時代中期後半の土器10片ほどがある。

第3号配石 (第8図、図版第10～13)

調査区域東側のB-8、9グリッドにおいて発見された。4.5mの直径をもつ、平面形状が環状を呈した配石である。配石内には焼土跡1箇所、土城1基をもつ。溶岩礫、河原石、ヘギ石を使用しており、石棒、砥石、凹石、などが配石内より検出されている。石棒は4本検出され四方に配されている様子うかがえた。また、ほぼ中心に位置する礫は立石に近い状況である。礫の大きさは、30～40cmほどの人頭大のものがほとんどで、50cm以上の大きい礫5個、拳大の小さなもの約20個と含め約100個の礫で構成されている。焼土跡は、径60cm、厚さ20cmを測る。土城は、径95cm、深さ20cmを測る。配石は褐色土層上面に構築されている。遺物としては、上記した石棒4点(第29図、図版第25-A)、砥石1点(後29図、図版第24-7)、凹石1点(第29図、図版第25-A)の他に磨



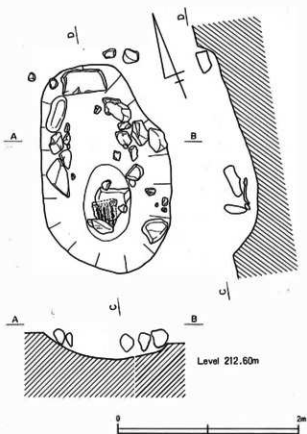
第8图 第3号配石灰测图

製石斧1点(第28図、図版第27-B)、石鎌2点(第32図、図版第26-A)、と縄文時代中期末葉の土器10片と縄文時代後期前半の土器(第25図、図版第16-20)を検出している。

第4号配石

(第9図、図版第13-14)

調査区域西側、A-2グリッドにおいて発見された。すぐ西側には30cm隔てて第1号配石がある。第1号配石、第2号配石同様に配石基で、上部には配石、下部には埋壘を伴った土壇をもつものである。長軸方位はN-13°-Wで、土壇の規模は2.8×1.4mで深さは最深部で45cmを測り、楕円形を呈している。上部の配石は、南向きに口を開き馬蹄形状に配されていた。礫は溶岩礫と河原石を使用している。褐色土上面に構築されている。遺物としては、砥石(第29図、図版第24-6)と埋壘として使用された縦に半截された深鉢形土器(第23図、図版第15-11)が出土している。



第9図 B地区第4号配石

V 遺 物

1. 土器

本遺跡からは縄文時代各期の遺物が発見された。土器としては早(?)～前期・中期前半～後期にかけてのものが出土している。この中で最も多く出土しているのが中期後半の土器で土器出土総数4227点のうち約95%を占めている。

本章ではこれらの資料を一応時間的経過の中での位置づけを行うことに主眼をおき第1群土器～第4群土器までの大別を行った。

第1群土器 縄文時代早(?)～前期

第2群土器 縄文時代中期前半

第3群土器 縄文時代中期後半

第4群土器 縄文時代後期

しかし、IV章でのべたとおり出土層位による新旧関係がつかめない状況であるため、これらを、器型、形態、文様などにより細別を行ない分類した。

なお、出土土器は本来、遺構内、遺構外を区別して分類せねばならないが、本遺構内出土の土器はその量も少ないところから、遺構外出土の土器と一括して分析を行いたい。

また、A地区、B地区における出土遺物の相違点については第1表に記した。

	第1群土器	第2群土器	第3群土器						第4群土器
			第1類				第2類		
			A種	B種	C種	D種	A種	B種	
A地区		○	○	○	○	○	○	○	
B地区	○	○	○		○	○	○	○	○

第1表 出土遺物比較表

(1) 第1群土器

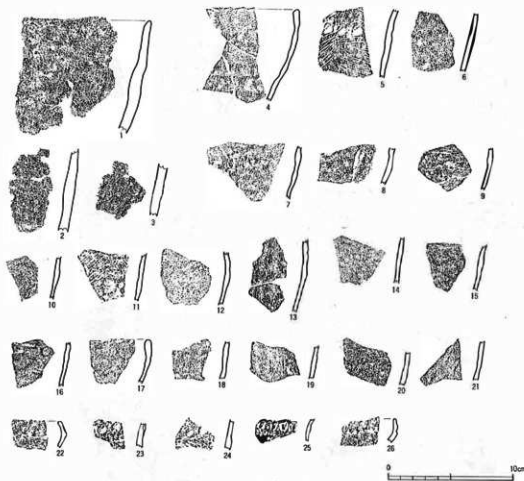
胎土に繊維を含む土器(第1類)と薄手の指痕を有する土器(第2類)とに分類される。

① 第1類(第10図-1～3、図版第17)

口縁部破片1片と胴部破片2片の3片が出土しており、同一個体と思われる。胎土に多量の繊維を含む。器面には擦痕がみられ凸凹がはげしい。色調は黒褐色である。

② 第2類(第10図-4～26、図版第17)

すべてが小破片で合計83片が出土している。器壁0.2～0.4cmほどの薄い土器で指痕を有し、精選された胎土で堅く焼成している。器形はすべて深鉢形をなすと思われる。口縁部はやや内湾するもの(4)と、内側に「く」の字に折れるもの(22、26)がある。前者は口縁部に刻目が認められる。後者は頸部に刻目が施されている。胴部文様は羽状あるいは格子状に細線を施すもの(5、7、10、11、24)以外は、植物の茎状のもので擦痕状に施すものである。色調は黄褐色、黒褐色を呈



第10図 土器拓影(第1群土器)

する。縄文時代前期木島式土器に比定できるものである。

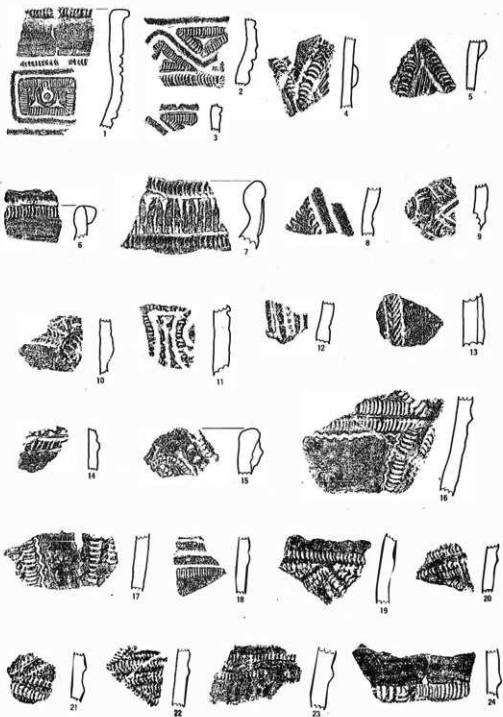
② 第2群土器(第11、12、22、図、図版第17、18、23)

縄文時代中期勝坂式土器の範疇に含まれると思われるものを本群とした。

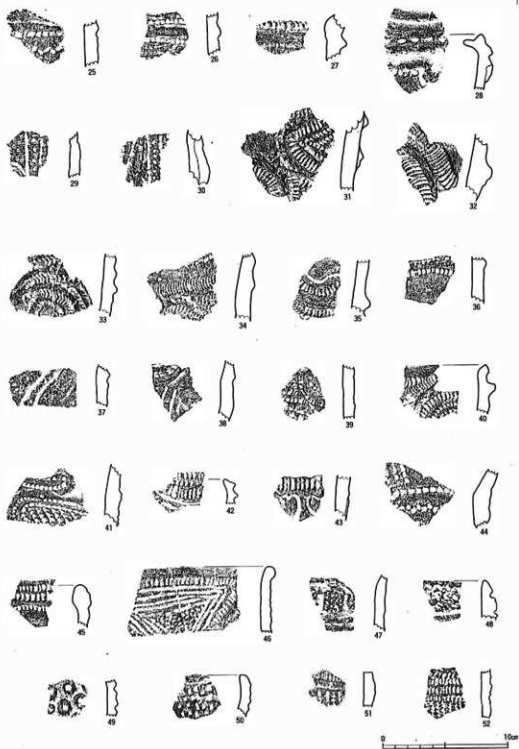
ほとんどが小破片であるため、器形、文様、文様構成など細かな分類はできない状況である。

1～15、第22図4、は隆帯に刻目をもつもので半截竹管状工具や篋状工具などにより連続する刺突列点を施している。1～3は器面を何段かに分け文様区画をつくっている様子がうかがえる。1、6は口縁で、口唇部を直角に小さくつまみ出すように外反させるものである。第22図4は、A地区第1号配石内出土のものである。16～30は、隆帯の両側に刺突列点を施すものうち直線的な文様構成をとるもの。半截竹管状工具による連続刺突文が施される。文様区画内も同様の施文具で充填される。

31～42、第22図1、は、隆帯の両側に刺突文を施すものうち曲線的な文様構成をとるもの、半



第11圖 土器拓影(第2群土器)①



第12图 土器拓影(第2群土器)②

截竹管状工具による連続刺突文が施される。文様区画内も同様の施文具で充填する。第22図1はB地区A-5、A-7グリッドから発見された。

43~52は、隆帯による文様区画をとらず連続刺突文により文様構成を行うもの。

などがある。

(3) 第3群土器

縄文時代中期後半の関東の加曾利E式、信州の曾利式に比定でき得る土器を本群とした。分類は地文が櫛歯文、半截竹管文等の沈線文であるものを第1類、地文が縄文であるものを第2類とした。

第1類(第13~16図、第22図、図版第15、18~20)

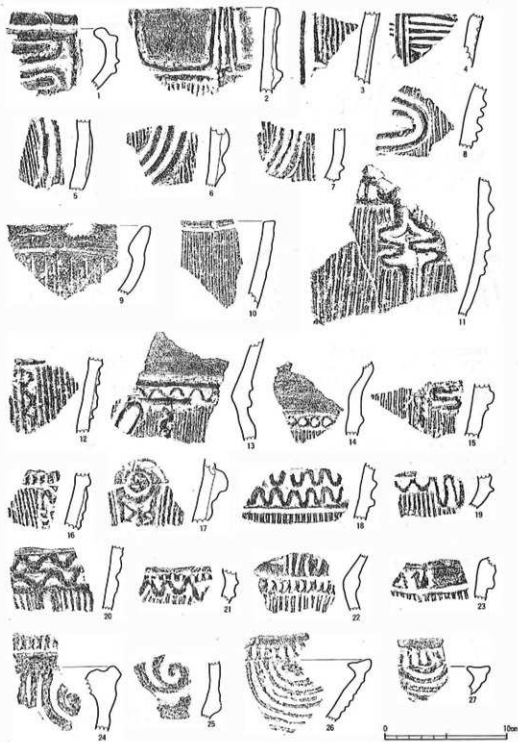
A-1(2~8)櫛歯状工具、半截竹管工具、筒状工具等による沈線文に何条かの粘土紐を貼りつけて区画を行なうもの。2は器厚0.7cmで口縁部から緑帯部に4本の粘土紐を懸垂させ、緑帯部には2本の隆帯を横走させる。推定口径5.1cmを測る深鉢である。色調は茶褐色である。半截竹管状工具による沈線文の地文に2本の平行する隆帯を懸垂させる。器厚は0.9cmで色調は暗褐色を呈する。4は筒描きの横線と2条の懸垂する隆線とが組み合わさる。器厚0.9cmで色調は暗褐色を呈する。5~7は、櫛描き、筒描きの沈線文に、2~3条の隆帯が同心円状に配されている。器厚0.6~0.9cm、色調は黄褐色、赤褐色を呈する。8は、筒状工具による沈線文に2条の楕円を呈する隆帯を配したもの。器厚0.8cm。色調は赤褐色を呈する。

A-2(9、10)口縁直下に沈線をめぐらせ胴部沈線文と画する。9はやや外反させる口縁で筒描きの間隔の広い沈線文を地文とする。器厚0.9cm、色調は暗赤褐色を呈する。10は、櫛描きの沈線文を地文とし器厚1.0cm、色調は茶褐色を呈する。

B-1(11~23)口縁部と胴部を区画するために頸部に粘土紐を直線的あるいは波状に貼りつけたり、隆帯上に刻目をつける。あるいは、頸部から胴部に粘土紐による懸垂文をもつもの。11は、筒描きの沈線文に頸部に波部の粘土紐を貼りつけ、同じく粘土紐による隆帯を懸垂させる。器厚は0.7cm、黄褐色を呈する。12は、半截竹管状工具による沈線文に、2本の隆帯の間に波状の粘土紐を懸垂させる。器厚1.1cm、色調は茶褐色を呈する。13、18~21、23は、頸部に波状の粘土紐を横走させ、口縁部と胴部を区画する。器厚は0.9~1.2cm、色調は茶褐色、暗褐色を呈する。14、22は、頸部の隆帯上に刻目をもつものである。器厚は0.7~0.95cm。色調は茶褐色、黒褐色を呈する。15は、櫛描きの沈線文に隆帯に刻目をつけたものを横走、懸垂させる。器厚1.1cm、色調は暗褐色を呈する。17は、半截竹管状工具による沈線文に2本の隆帯の間に2条の波状の粘土紐を懸垂させ、その上部に渦巻状の小突起を有する。器厚は1.0cm、色調は茶褐色を呈する。

B-2(24・25)、口縁部に渦巻文をもつもの。24は、内湾する口縁部をもち、口唇部に刻目をもつ、器厚は1.2cm、色調は暗褐色を呈する。

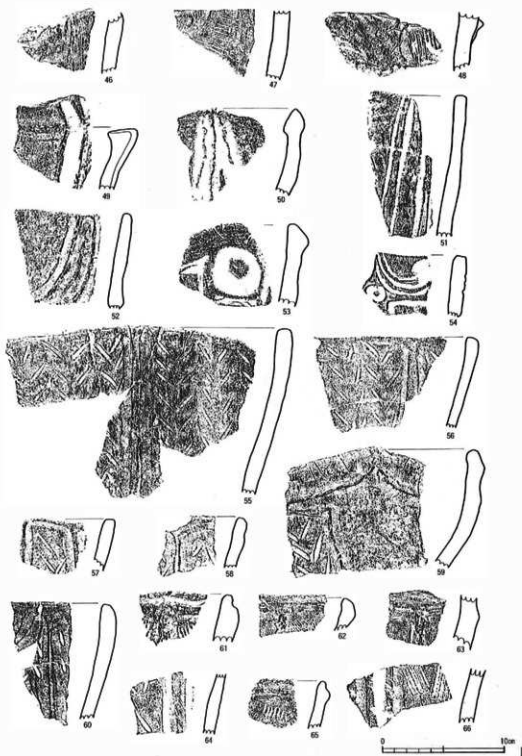
B-3(26~38)半截竹管状工具による弧線状の沈線が重なって施文されているのを特徴とする土器群。26、27、37、38は、口縁内側に突起をめぐらせた口縁部。半截竹管状による重弧文を施す。器厚は0.8~1.0cmで、黄褐色、黒褐色を呈する。28~32は、口縁部に数本の隆線による波行線文



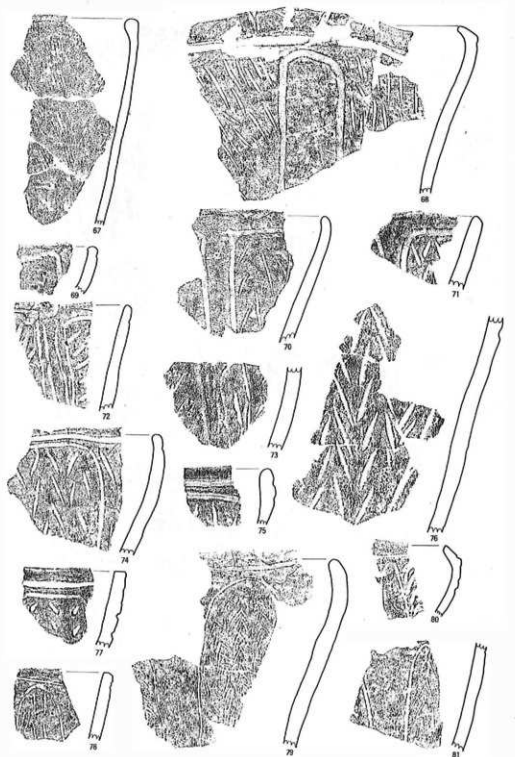
第13图 土器拓影(第3群土器)①



第14圖 土器拓影（第3群土器）②



第15图 土器拓影 (第3群土器) ③



第16図 土器拓影 (第3群土器) ④

を有するものである。28、29は同一個体と思われ、内側に大きく内湾する口縁をもつ。推定口径は42.5cm、器厚は0.9cmで、黒褐色、暗褐色を呈す。33、34は、同心円状に配した隆線を被状隆線で区画するもの。器厚は1.1cm、色調は、黄褐色、赤褐色を呈する。35、36は、頸部から胴部にかけてのもので、器厚0.6cm、色調は赤褐色を呈する。

B-4 (39~45)、斜めの沈線、隆線に交叉し格子状に粘土紐を貼付した。41は、口縁内側に突起をめぐらせた口縁部で、口唇部に2条の沈線をめぐらす。右下りの半截竹管状工具による沈線文に交叉するように粘土紐を貼付した。器厚は1.4cm、色調は黒褐色、赤褐色を呈する。39、40、42~45は、口縁部と胴部を区画するのに用いられると思われる。39、40は沈線に、42~45は隆線に粘土紐を貼りつけたものである。器厚は、0.7~1.1cmで、色調は、黄褐色を呈する。

C-1 (46~48、53) 隆帯による大きな渦巻文が配されると思われるものである。地文は、櫛描きの沈線文で、器厚1.1~1.3cm、色調は黄褐色を呈する。

C-2 (49、50) 被状口縁で2~3条の隆線を懸垂させる。器厚は0.9、1.2cm、色調は黒褐色、赤褐色を呈する。

C-3 (51、52、54) 平縁で口縁の開く深鉢で、口縁に2~4本の沈線、隆線による弧状文 懸垂文を描く。器厚は1.1~1.2cmで色調は黄褐色を呈する。

D-1 (50、56、60、62) 55、56は同一個体と思われ籠描きの`ハ、の字状文を地文とし、62は口縁部からすぐに幅広い隆帯を懸垂させる。推定口径は22.5cm、器厚は0.9cm、色調は茶褐色を呈する。60は肉彫的な隆線を懸垂させる。器厚は0.9cm、色調は黒褐色を呈する。

D-2 (57~59、61~66、第23図9、11) 口縁直下に微隆起線をめぐらし、胴部に縦の隆線をおろす。地文は籠^ハ状工具による`ハ、の字状文や櫛^ハ状工具による条線文、押圧文などである。第23図9はB地区B-2、3グリッドより出土したもので籠^ハ状工具による浅い沈線文で、1.0~1.5cmほどのやや太目の粘土紐を2条懸垂させる。裏側にも同様なのがみられる。器形は円筒状深鉢で底部径は6.8cmを測る。色調は、黒褐色、暗赤褐色を呈する。第23図9は、B地区第4号配石の埋甕で縦に半截されたもので、やや内湾する口縁下約3cmに太目の隆帯をめぐらし、約10cm間隔で胴部隆帯は籠^ハ描きによる樹木を思わせる文様を施す。口径は27cm、推定器高35cmを測る深鉢で、黒褐色を呈する。

D-3 (67~81、第23図8) 口縁はやや内湾する単純な形の深鉢で、口縁に沈線をめぐらして胴部の上端をつなげた平行沈線を下ろして、沈線区画内に`ハ、字状沈線などを地文として埋める。67、69は櫛描きの条線を地文とし、器厚0.8cm、色調は黄褐色、赤褐色を呈する。68、70~81は籠^ハ描きの`ハ、字状文で器厚は0.6~1.3cm、色調は黒褐色、黄褐色を呈する。第33図8は、口径31cm、推定器高約33cmを測り口縁がやや外反する深鉢で櫛^ハ状工具を押圧する列点文を地文とする。

第2類 (第17~20、22、23、25図、図版15、16、20~22)

縄文時代中期後半の土器の中で縄文を地文とするものを本類とし加曾利EⅠ~EⅢ式土器と思われる土器をA、加曾利EⅣ式土器に比定し得るものをBとして取り扱い、それぞれ文様帯によっていくつか分類した。

A-1 (82、85、88、91、93、95~97) 文様帯区画文が隆帯によって構成されるもの。83はキ+リバー状深鉢の頸部でRLの縄文が施される。器厚1.1cm 色調は黄褐色を呈する 88は波状口縁で隆帯が把手状につくものと思われる。器厚1.1cm、色調は黒褐色を呈する。91の縄文はLRで器厚1.1cm、色調は黒褐色を呈する。93は隆帯上に縄文が施される。器厚1.3cm、色調は赤褐色を呈する。85は粘土紐を横に波行させて貼りつける。95は縦に波行する粘土紐を貼付する。96、97は縦方向に2条の隆線を懸垂させる。96の縄文原体はRLである。器厚0.8~1.1cm、色調は黒褐色、赤褐色を呈する。

A-2 (113) 頸部に隆線をめぐらし、口縁が内湾する深鉢。器厚1.2cm、色調は茶褐色を呈する。

A-3 (83、84、89、90、94、第22図7、第23図10) 口縁部文様帯が沈線で構成されるもの。89は連弧状沈線が配され、LRの縄文を口唇部では横方向に、頸部にかけては縦方向に施す。90は口唇部を横方向に、それ以外を縦方向にLRの縄文を粗雑にやや角度を変えながら施文する。器厚は1.2、0.9cm、色調は暗褐色を呈する。第23図10は、外反する口縁に連弧状沈線が等間隔に8箇所施文されると推定される。連弧状沈線間から胴部にかけては2本の平行沈線を垂下させる。推定器高21cm、器厚は1.3cmを測る。縄文は縦方向にLRの縄文を施す。色調は茶褐色、黒褐色を呈す。83、84、94は器厚0.8~1.1cm、色調は赤褐色、茶褐色を呈する。第22図7は小型の深鉢形土器で推定口径約8cm、推定器高約8.6cm、器厚1cmを測り、RLの縄文を施し、色調は茶褐色を呈す。

A-4 (86) 器面に沈線による渦巻文が展開するもの。LRの縄文を施し、器厚1.2cm、色調は茶褐色を呈する。

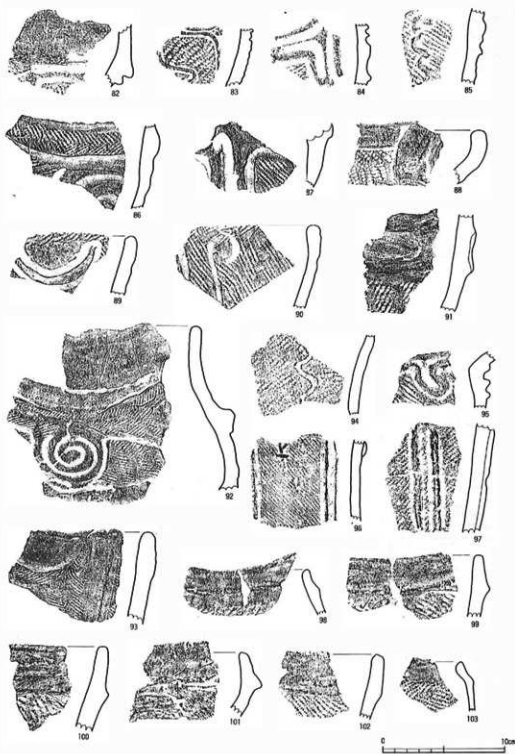
A-5 (92) 器面に沈線による渦巻文が展開するもので、口縁が内傾する特殊な器形で、器厚1.2cm、色調は黒褐色を呈する。

B-1 (99、100、102、104、115~119) 口縁に微隆起線をめぐらし、胴部にも隆線による直線的な平行線文を施文し、口縁は平縁で直立するものとやや内傾するものを本類とした。地文の縄文は、RL (99、100、102、104、115)、LR (116)である。119は、RLの縄文を縦方向に施文する間に、無節Lの縄文を羽状に施文する。器厚0.8~1.3cm、色調は赤褐色、黄褐色、茶褐色を呈する。

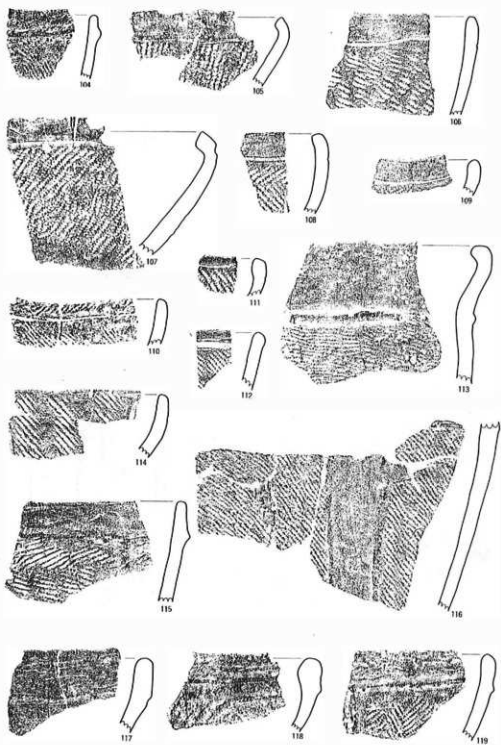
B-2 (98、103) 口縁に微隆起線をめぐらすだけのもので、強く内傾するものを本類とした。98はLRの縄文原体を施文し、器厚0.7cm、色調は茶褐色。103は、RLの縄文原体を施文し、器厚0.9cm、色調は赤褐色を呈する。

B-3 (106、108~112 第23図13) 口縁に沈線をめぐらすだけのもの。深鉢で口縁部は、やや内湾するか直立する。地文の縄文は、RL (106、111、112)、LR (109、110)である。108は羽状に上→下の順序で2段以上施文している。器厚は0.9~1.2cm、色調は茶褐色、暗褐色、灰褐色を呈す。第23図10は、内湾する波状口縁をもち、橋状把手がみられる。文様は口縁に沈線をめぐらすだけのもので、RLの縄文が施される。口径は16cm、推定器高16.5cm、器厚は0.6cm、色調は暗茶褐色を呈する。

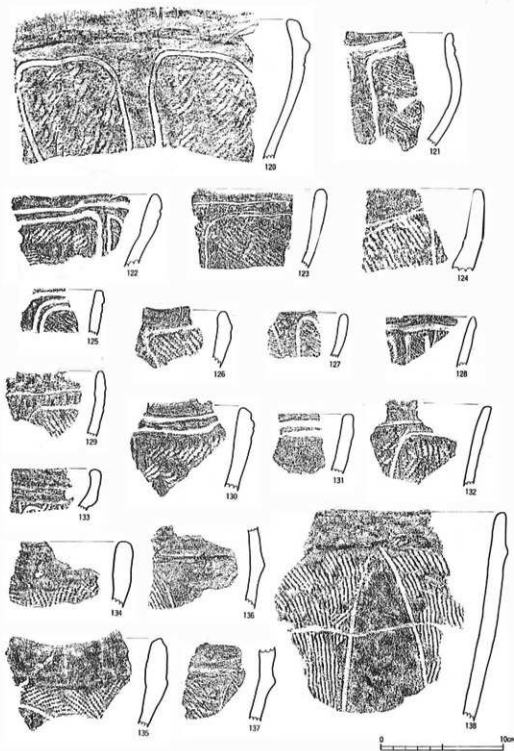
B-4 (105、107) 口縁に沈線をめぐらすだけのもの。浅鉢である。いずれもLRの縄文を施



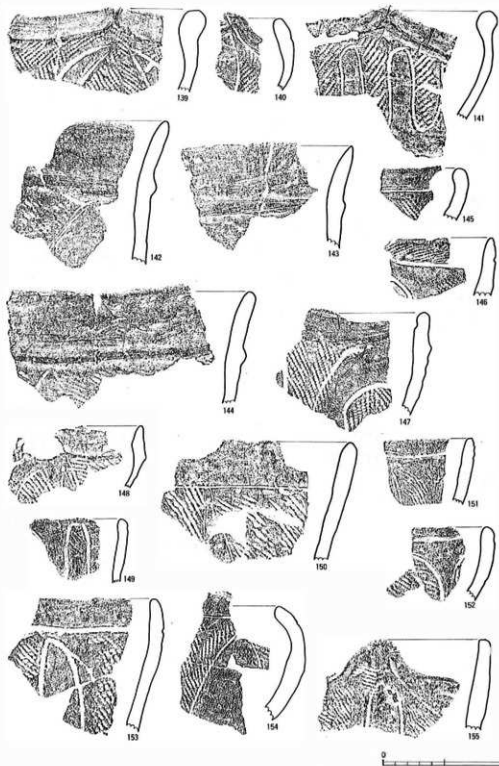
第17图 土器拓影 (第3群土器) ⑤



第18圖 土器拓影(第3群土器)⑥



第19回 土器拓影 (第3群土器) ①



第20圖 土器拓影（第3群土器）⑧

す。器厚0.9、1.3cm、色調は茶褐色を呈する。

B-5(101、102、第25図20)口縁に隆線をめぐらし、胴部文様区画を沈線による直線的な平行線文で行うもの。深鉢で101、120の口縁はやや内湾する。器厚1.2、0.8cm、色調は赤褐色、黒褐色を呈する。第25図20は、口径35cmを測り、口縁に微隆起線をめぐらし、沈線による平行線文を描き、平行線内にRLの縄文を充填する。色調は茶褐色を呈する。

B-6(121~132)口縁に沈線をめぐらし、胴部にも沈線による直線的な平行線文を施文する。深鉢で口縁は平縁で直立するもの(123、125、128、129、131、132)、内湾するもの(121、122、124、126、130)がある。いずれも平行線内に縄文が施される。器厚0.8~1.2cm、色調は茶褐色、黒褐色、赤褐色を呈する。

B-7(133~139、141~144、147、148、第23図12)口縁に微隆起線をめぐらし、胴部には沈線による曲線的な平行線文を描く。波状口縁のもの(134、135、139、141、147、148、第23図12)と平縁のもの(133、136~138、142~144)がある。波状口縁の波頂部には小突起がつくと思われる。134、135、139は平行線内を無文とし、縄文は方向をかえて施文している。地文の縄文は、RL(137、142~144、147、148)LR(133、141)で136、138は無筋の縄文である。器厚は、0.7~1.2cm、色調は黒褐色、黄褐色、赤褐色を呈す。第23図には、内湾する口縁に橋状把手をもつもので、縄文を角度を変え施文している。口径12cmを測り、平行線内を無文とする。器厚0.6cm、色調は暗茶褐色を呈する。

B-8(140、145、146、150~155)口縁に沈線をめぐらし、胴部にも沈線による曲線的な平行線文を施文する。波状口縁のもの(140、155)と平縁のもの(145、146、150~154)とがある。地文の縄文は、RL(145、150~155)、LR(140、146)である。器厚は、0.6~1.3cm、色調は黒褐色、暗褐色を呈する。

(4) 第4群土器(第21、24、25図、図版第16、22)

縄文時代後期と思われるものを本群とした。

第1類(第21図2、第24図17)加曾利E式の色彩の濃い土器で、胴部に曲線的な沈線で文様区画を行い、平行線内に縄文を施文する。いわゆる磨消手法がみられる。いずれもRLの縄文を施す。器厚0.9、0.8cm、色調は暗褐色を呈する。

第2類(第21図4、第24図15、16)口縁部から頸部にかけて連弧状の平行沈線を描く。第24図15、16は同一個体で平行線内にはRLの縄文を充填させる。口縁部が「く」の字に外反する深鉢で、胴部にも口縁部同様の施文方法による沈線がみられる。16には穿孔がみられる。推定口径は32.5cmを測る。色調は黄褐色を呈する。第21図4は、器厚1.1cm、色調は暗茶褐色を呈する。

第3類(第24図19)直立する口縁直下に隆線をめぐらし、胴部は渦巻状の平行沈線による文様を描く。推定口径は38cm、器厚は1.2cmを測る深鉢である。縄文は、LRの縄文原体を縦方向に回転させたと思われる。色調は暗茶褐色を呈する。

第4類(第21図5、8)植物の茎状のものによる擦痕をもつ深鉢。同一個体とみられ、器厚は0.

7 cm、色調は黒褐色を呈する。

第5類（第21図6、7）同一個体とみられ、平縁で直立する器形をもつ深鉢で、器面全体にR L Rの縄文を施す粗製土器である。器厚0.9 cm、色調は茶褐色を呈する。

第6類（第21図1、3）口縁部に突起をもつもので、1は突起から横方向、斜め下方向に沈線を走らせ文様区画を行うらしい。沈線の周囲には縄文がみられる。2は縦長の楕円状の沈線内に棒状工具による斜めの刺突がみられる。器厚0.7、0.9 cm、色調は、灰褐色、茶褐色を呈する。

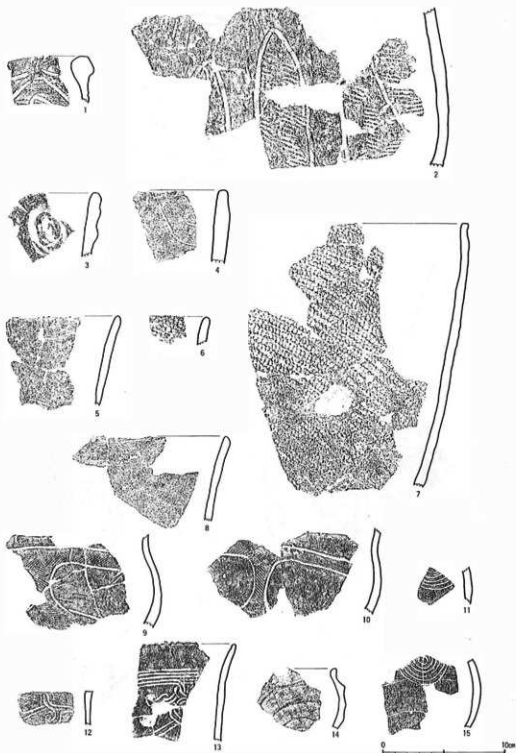
第7類（第21図9、10）同一個体とみられ、沈線による曲線的な文様区画内を無文とする精製土器である。縄文は2段以上施文している。器厚は0.7 cm、色調は黄褐色を呈する。

第8類（第21図11、15）同一個体とみられ、胴部文様として、同心円状に幾重にも沈線を描く精製土器。器厚0.7 cm、色調は黄褐色を呈する。

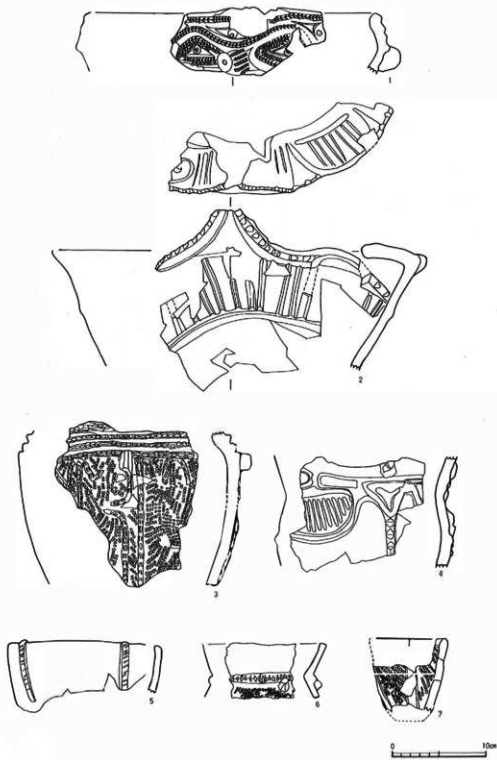
第9類（第21図12、13）同一個体とみられ、口唇部に刻目をもち、口縁内側に沈線をめぐらす。直線的、曲線的な沈線の組み合わせで文様構成を行う。やや外反する深鉢である。器厚0.6 cm、色調は黄褐色を呈する。

第10類（第21図14）指でつまみあげて同心円状に隆線をつくりだしているともみられる土器。器厚0.6 cm、色調は暗茶褐色を呈する。

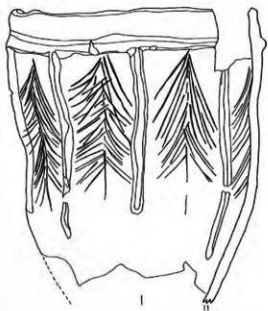
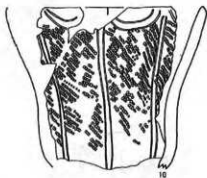
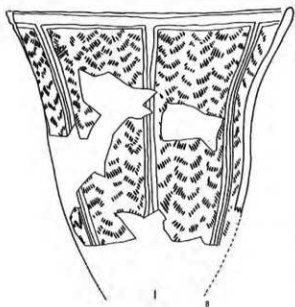
第11類（第25図21）吊手をもつとみられる楕円形の輪郭をした特殊な器形をもつ土器である。口縁下から吊手にかけて隆線をめぐらせ、口唇部と隆線内側に鋭角的な工具による刺突の列点文を2列配列する。胴部文様は、縦長の楕円状に沈線をめぐらせ、沈線内にR Lの縄文を充填させる。この沈線区画は6方にみられ、区画間は下方にむけて何度もヘラケズリが行われた痕跡がみとめられる。口径は22×27 cmを測る。器厚は0.7 cm、色調は赤褐色を呈する。



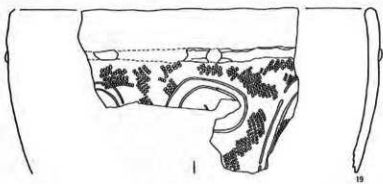
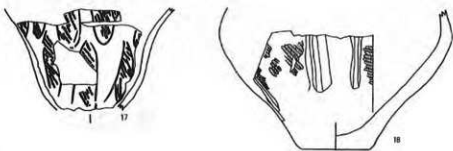
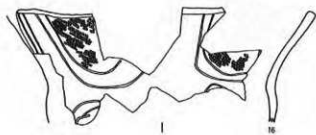
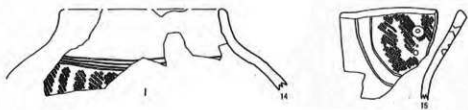
第21图 土器拓影(第4群土器)



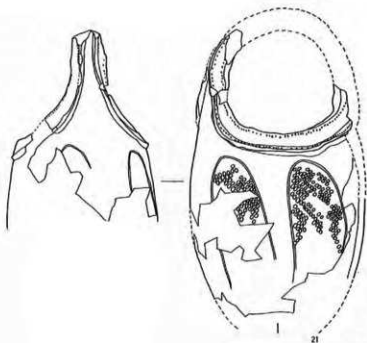
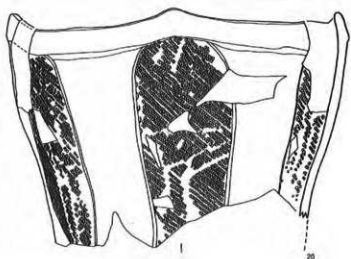
第22图 土器実測图①



第23图 土器実測图②



第24图 土器実測图③



第25図 土器実測図④

2. 石器

本遺跡から出土した縄文時代の石器は、表面採集資料を含めて、打製石斧37点（完形品27点、破片10点）、磨製石斧1点（破片）、礫石（2点いずれも破片）石匙3点（完形品2点）石錘1点（完形品）、磨石7点（完形品4点、破片3点）石棒4点（いずれも破片）、砥石2点（完形品2点）、軽石1点（完形品）、凹石2点（完形品2点）、石皿5点（いずれも破片）、石畿70点（完形品14点、破片56点）、石錐3点（完形品2点、破片1点）の計138点である。他に刮片が306点ほどある。

これらの石器は本遺跡出土の土器に伴出するものと思われるが、一部をのぞいては層位的にはとられなかった。このため本章では各石器を形態によって分類することにした。各石器の計測値は第2表に示した。

(1) 打製石斧（第27、28図、図版第26、27）

A類 撓形、B類 短冊形、C類 分銅形の3形態に分類した。

A類（2～4、6～12、14、16～19、21～25、28～33、37）

合計28点出土しており、全体の約4割を占める。このうち完形品は27点である。一般的に撓形の打製石斧は細長い台形を呈し、長辺部にくびれがほとんどなく直線的であるものをさす。しかし、本類の多くはその典型ではなく、長辺部に弱いくびれをもつものや弱い張り出しをもつもの、刃部が丸みを帯びるものなどを含んでいる。6、7、11は砂岩系の石材を使用している。11は片岩系の石材、16、17は頁岩を使用しており、これ以外はいずれも安山岩を石材として使用している。6には着柄痕がみられる。28は加工中途のものようだが、使用痕がみとめられる。大きさは10cm以下のものがほとんどで、それ以上のものは10点を数えるのみで、全体的に小形である。

B類（1、5、13、15、20、26、27、34）

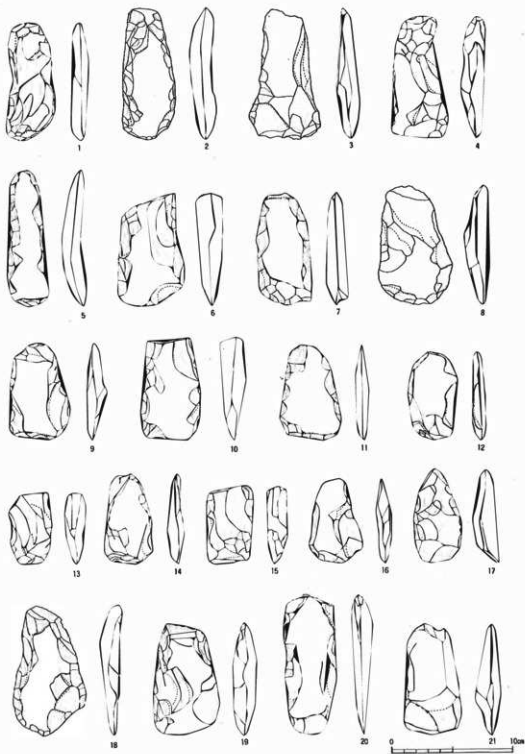
本遺跡からは8点出土している。1は片岩系の石材を使用して若干のくびれをもつ。5は砂岩系の石材を使用している。細長く、頭部と刃部の幅を比較した場合撓形ともとれる形態をもつ。13、15、20、26、27、34は安山岩を使用している。27は短冊形の典型としてよいタイプである。20、26は弱いくびれをもつものである。

C類（36）

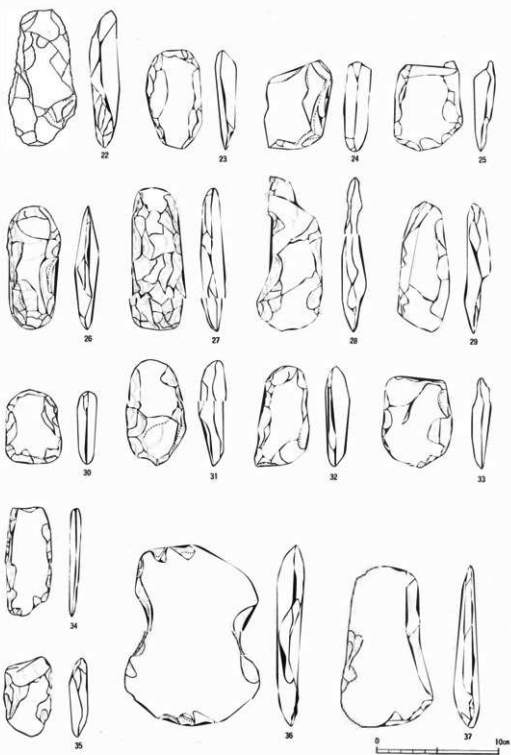
本遺跡では1点出土しているのみである。他の2形態に比べ大形であることが一つの特徴といえる。中央部にくびれを有し、頭部、刃部の区別はなく、両方に使用痕がみとめられる。石材は安山岩を使用している。

(2) 磨製石斧（第28図38、図版第27）

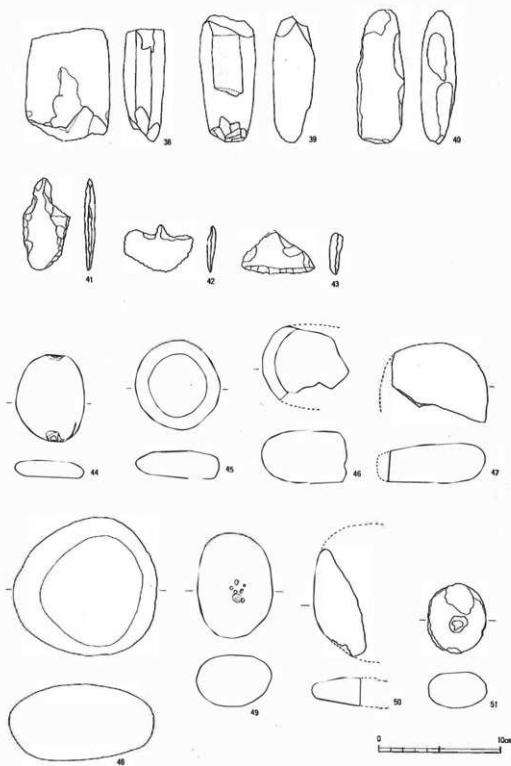
1点出土しているが欠損品である。緑泥片岩製で、幅6.9cm、厚さ約3.2cmで全面を長辺に平行して磨かれている。頭部並びに刃部の欠損後礫石として使用された可能性もある。



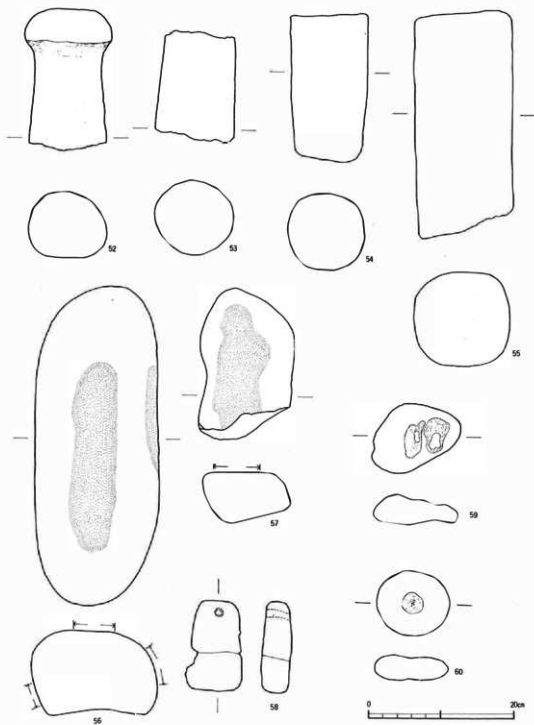
第26图 石器实测图(1)



第27图 石器实测图(2)



第28回 石器実測図(3)



第29图 石器实测图(4)

(3) 敲石 (第28図39、40、図版第27)

2点出土している。39は硬質砂岩製である。40は、緑泥片岩製で片面に磨った痕跡があり、石斧としての使用も考えられる。刃部は鈍化し、石斧としての機能を失われた後、敲石として使用されたものである可能性が高い。

(4) 石匙 (第28図41～43、図版第27)

3点出土している。41、42は完形品であるが、43は基部が破損している。41は縦形で、42、43は横形のものである。大きさはいずれも小形のものである。41、44は頁岩製で、42は安山岩製のものである。

(5) 石錘 (第28図44、図版第27)

1点のみの出土である。偏平な楕円形の鏝を用いている。鏝の長軸両端を打ち欠いて凹みをつけてある。硬質砂岩を使用している。

(6) 磨石 (第28図45～51、図版第27)

合計7点が出土している。完形品は、45、48、49、51の4点で、45は偏平な円形の鏝を使用している。48は最も大きく、49、51には偏平部分に敲打痕が認められるものである。出土した7点すべてが砂岩系の石材が使用されている。

(7) 石棒 (第29図52～55、図版第25)

4点出土しており、すべてが欠損品である。53、55は両端部を欠くものである。52は頭部にくびれをもつものである。54は下端部であるとみられる。53、54の断面はほぼ円形であるが、52はやや楕円形、55は隅丸方形にちかい断面である。火山岩系の鏝を使用している。

(8) 砥石 (第29図56、57、図版第24)

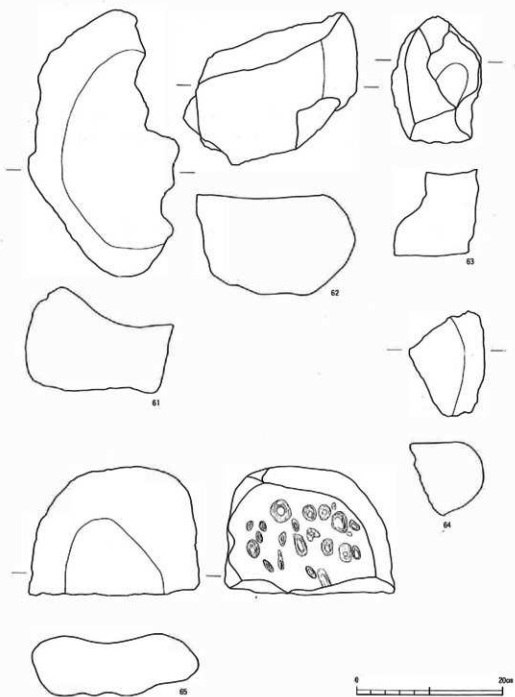
2点出土している。56は砂岩質のもの、57は安山岩を使用している。56は大形のもので、3方に研磨痕がみられる。57は欠損品であるが上面にのみ研磨痕がみられる。

(9) 軽石 (第29図58、図版第25)

本遺跡からは1点出土しているのみである。有孔の軽石製浮子といえるものであろう。

00 凹石 (第29図59、60、図版第25)

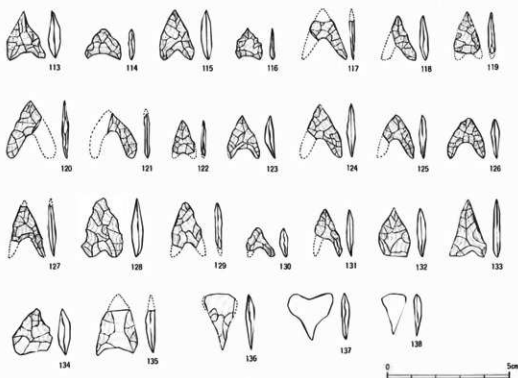
2点出土している。59は火山鏝で数個の小孔が集まって2箇所の大きな凹みをつくり出している。60は砂岩質の鏝を使用しており、孔は両面にありほぼ中心部にある。



第30图 石器实例图(5)



第31图 石器实测图(6)



第32図 石器実測(図7)

① 石皿 (第30図、図版第24)

5点が出土している。いずれも欠損品である。61、65は使用面が凹んでいるもの。62、63、64は使用面がほぼ平らなものである。両面を使用しているものはみられないが、65は裏面に、敲打による凹みがみられる。石材は本遺跡周辺に普遍的にみられる溶岩礫を使用している。

② 石鏃 (第31、32図113～135、図版第25、26)

本遺跡からは合計70点が出土している。石材はチャート使用のものが3点ある他はすべて黒曜石である。石鏃の形態は、基部の扶込みによってA～C類に分類した。A類は基部にまったく扶込みをもたず、三角形の形状をなすもので2点を数える。B類は基部の扶りが小さく全長の $\frac{1}{4}$ に満たないもので39点を数え、本遺跡出土の石鏃の中では出土例が一番多い。C類は扶込みが大きく全長の $\frac{1}{2}$ をこえるもので16点を数える。残りの14点は基部が欠失しているため、分類が不可能であった。

③ 石錐 (第32図136～138、図版第26)

3点出土している。136は黒曜石、137、138は真岩を使用している。136は、両面を入念な剥離作業で整えている。137、138は、剥片を素材とし、舌部を作出している。

№	地区	出土区	长度 (cm)	幅 (cm)	厚度 (cm)	重量 (g)	№	地区	出土区	长度 (cm)	幅 (cm)	厚度 (cm)	重量 (g)		
1		打製石斧	D-2	96.85	39.80	13.05	82.0	49	磨石	E-2	84.95	60.75	41.45	289.0	
2		打製石斧	B-2	107.25	43.10	16.80	108.0	50	磨石	H-1	—	—	—	(23.30)	
3		打製石斧	C-1	(105.30)	58.95	14.75	(119.0)	51	磨石	A-2	56.70	47.75	31.25	110.0	
4		打製石斧	B-2	99.70	47.20	19.65	102.0	52	石棒	第3号配石	—	—	—	95.70	
5		打製石斧	A-2	110.35	32.45	12.65	69.0	53	石棒	第3号配石	—	—	—	102.65	
6		打製石斧	A-2	(91.55)	55.30	23.30	(134.0)	54	石棒	第3号配石	—	—	—	103.80	
7		打製石斧	A-2	91.40	45.60	17.45	89.0	55	石棒	第3号配石	—	—	—	128.15	
8		打製石斧	B-2	96.85	60.80	20.75	123.0	56	砥石	B	第4号配石	438.30	177.00	117.20	16200.0
9		打製石斧	C-2	79.40	49.20	16.10	71.0	57	砥石	第3号配石	—	—	—	89.15	
10		打製石斧	A-2	(84.45)	49.05	19.40	104.0	58	砥石	第3号配石	123.45	76.40	36.30	94.0	
11		打製石斧	A-2	77.25	49.55	10.75	48.0	59	砥石	第3号配石	129.30	85.70	44.70	345.0	
12		打製石斧	A-2	71.45	40.50	11.45	41.0	60	砥石	H-1	88.90	99.70	35.15	449.0	
13	A	打製石斧	A-2	(58.30)	34.40	16.20	(38.0)	61	砥石	C-1	—	—	—	141.10	
14		打製石斧	B-1	73.10	39.20	14.20	45.0	62	砥石	C-2	—	—	—	138.35	
15		打製石斧	B-2	(63.50)	50.15	18.70	(59.0)	63	砥石	B-2	—	—	—	107.50	
16		打製石斧	B-1	88.70	44.90	12.60	42.0	64	砥石	A-2	—	—	—	103.40	
17		打製石斧	A-2	77.25	39.30	18.35	57.0	65	砥石	表採	—	—	—	85.05	
18		打製石斧	表採	105.65	50.15	15.25	105.0	66	砥石	A-1	(13.65)	(10.65)	4.15	(0.55)	
19		打製石斧	表採	90.95	56.80	19.55	122.0	67	砥石	A-1	18.65	11.60	3.55	(0.50)	
20		打製石斧	表採	113.55	42.50	15.75	98.0	68	砥石	A	A-2	(12.00)	(17.30)	(2.50)	(0.35)
21		打製石斧	Z-2	90.40	47.65	20.75	96.0	69	砥石	B-1	(25.00)	(10.90)	2.35	(0.45)	
22		打製石斧	表採	11.85	56.35	24.55	158.0	70	砥石	B-2	18.75	11.70	2.20	0.55	
23		打製石斧	表採	81.80	45.75	15.10	71.0	71	砥石	B-2	(17.50)	(16.55)	2.75	(0.45)	
24		打製石斧	G-2	(73.25)	54.70	21.15	(105.0)	72	砥石	B-2	(16.50)	(11.10)	2.30	(0.30)	
25		打製石斧	I-2	(73.15)	55.60	18.75	(91.0)	73	砥石	C-1	(17.10)	(13.80)	(3.10)	(0.55)	
26		打製石斧	I-2	100.45	42.65	18.40	90.0	74	砥石	D-1	20.00	14.70	3.20	0.55	
27		打製石斧	I-2	116.50	44.50	19.85	129.0	75	砥石	表採	(9.20)	(9.95)	(2.20)	(0.15)	
28		打製石斧	E-1	126.75	51.80	20.20	109.0	76	砥石	D-1	(16.60)	(4.80)	(2.15)	(0.20)	
29		打製石斧	H-2	107.20	41.10	19.95	85.0	77	砥石	E-1	(11.55)	(5.35)	(2.10)	(0.15)	
30		打製石斧	B-1	59.65	46.10	15.40	63.0	78	砥石	E-1	(20.90)	(14.70)	4.50	(1.00)	
31		打製石斧	G-1	86.10	50.25	19.70	101.0	79	砥石	E-1	(25.95)	(14.25)	2.80	(0.70)	
32		打製石斧	B	G-2	81.65	42.30	19.35	83.0	80	砥石	E-1	(11.20)	(4.75)	(2.10)	(0.10)
33		打製石斧	G-2	(74.60)	57.20	15.55	(80.0)	81	砥石	E-1	21.55	11.95	2.60	0.60	
34		打製石斧	G-2	(88.90)	38.40	9.65	(48.0)	82	砥石	E-1	12.45	13.35	2.85	(0.35)	
35		打製石斧	H-2	(64.60)	39.35	15.75	(52.0)	83	砥石	E-2	(11.25)	(4.45)	(2.10)	(0.10)	
36		打製石斧	F-2	147.40	111.35	23.55	470.0	84	砥石	E-2	(12.45)	(10.70)	(3.20)	(0.30)	
37		打製石斧	I-2	131.35	78.20	19.55	226.0	85	砥石	E-2	(23.85)	(15.20)	4.55	(1.40)	
38		磨製石斧	H-1	(93.30)	68.70	32.45	(360.0)	86	砥石	B	E-2	(12.75)	(9.40)	(3.35)	(0.45)
39		磨石	I-1	(102.65)	44.40	34.50	(223.0)	87	砥石	E-2	(12.95)	(12.45)	3.10	(0.35)	
40		砥石	第3号配石	109.05	38.40	28.85	192.0	88	砥石	E-2	(18.60)	(12.20)	2.75	(0.35)	
41	A	砥石	B-2	74.80	38.30	9.20	27.0	89	砥石	表採	(14.50)	(8.60)	(2.25)	(0.20)	
42		砥石	H-2	38.30	57.20	11.10	12.0	90	砥石	第3号配石	(14.15)	(12.70)	(2.75)	(0.35)	
43		砥石	D-2	(34.00)	60.90	10.45	(19.5)	91	砥石	F-1	(17.10)	(9.50)	(2.95)	(0.30)	
44		石棒	H-2	70.60	55.55	14.05	81.0	92	砥石	F-2	(17.40)	(12.45)	2.90	0.70	
45		磨石	F-2	72.15	68.55	21.30	138.0	93	砥石	F-2	(20.20)	(13.85)	3.05	(0.80)	
46		磨石	H-1	—	—	(42.40)	(229.0)	94	砥石	F-2	(15.70)	(14.90)	3.00	(0.45)	
47		磨石	C-2	—	—	(32.90)	(200.0)	95	砥石	F-2	(14.30)	(13.10)	3.20	(0.40)	
48		磨石	I-2	117.70	112.60	62.50	962.0	96	砥石	G-1	(15.30)	(10.25)	2.45	(0.30)	

No		地区	出土区	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重さ(g)	No		地区	出土区	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重さ(g)
97	石 鉄		G 1	(23.30)	(5.20)	2.60	(0.30)	118	石 鉄		H 1	(17.95)	(6.35)	(3.40)	(0.40)
98	石 鉄		G - 1	(18.25)	(9.60)	(2.10)	(0.30)	119	石 鉄		H 1	(17.20)	10.75	3.10	(0.50)
99	石 鉄		G 1	(12.80)	(13.20)	2.55	(0.30)	120	石 鉄		H 1	(23.55)	(9.00)	(2.45)	(0.50)
100	石 鉄		G - 1	(13.45)	(5.90)	2.15	(0.15)	121	石 鉄		H 2	(17.60)	(5.65)	(2.35)	(0.30)
101	石 鉄		G 1	(15.55)	13.00	3.30	(0.40)	122	石 鉄		H 2	(13.75)	(8.80)	(2.25)	(0.25)
102	石 鉄		G - 1	(22.45)	(13.25)	3.80	(0.70)	123	石 鉄		H 2	17.70	(12.35)	(3.95)	(0.65)
103	石 鉄		G 1	(16.00)	(16.45)	2.90	(0.70)	124	石 鉄		H 2	(22.20)	(13.00)	3.30	(0.70)
104	石 鉄		G - 1	(22.65)	(16.20)	3.95	(1.20)	125	石 鉄		H 2	(17.75)	(12.30)	2.65	(0.40)
105	石 鉄		G 2	15.85	13.80	4.25	0.70	126	石 鉄		I 1	16.00	15.35	3.20	0.50
106	石 鉄		G 2	(17.10)	(13.80)	4.50	(0.40)	127	石 鉄		I 1	(21.20)	13.00	2.95	(0.60)
107	石 鉄	B	G - 2	(20.10)	(13.10)	2.35	(0.40)	128	石 鉄	B	I 1	24.00	17.35	5.55	1.80
108	石 鉄		G 2	20.65	(14.50)	4.60	(1.00)	129	石 鉄		I 1	(18.00)	12.10	3.20	(0.60)
109	石 鉄		H 1	(13.00)	(11.40)	2.60	(0.45)	130	石 鉄		I 1	(12.00)	(11.30)	3.85	(0.30)
110	石 鉄		H 1	(15.10)	(12.30)	2.00	(0.40)	131	石 鉄		I 1	(18.95)	(10.20)	2.95	(0.60)
111	石 鉄		H 1	(15.70)	(14.10)	2.80	(0.50)	132	石 鉄		第3号配石	23.25	14.65	3.25	0.90
112	石 鉄		H 1	(18.95)	(11.25)	3.30	(0.45)	133	石 鉄		第3号配石	19.90	13.00	3.40	0.90
113	石 鉄		H 1	19.50	15.60	4.80	1.10	134	石 鉄		I 2	18.45	16.20	5.30	1.30
114	石 鉄		H 1	12.20	14.80	2.70	0.35	135	石 鉄		I 2	(18.00)	17.00	4.90	(1.40)
115	石 鉄		H 1	20.30	13.85	3.60	0.95	136	石 鉄		H 1	22.80	(12.80)	3.70	(0.75)
116	石 鉄		H 1	30.75	11.00	2.10	0.30	137	石 鉄		H 2	19.10	18.85	3.55	0.90
117	石 鉄		H 1	(15.95)	(12.45)	(2.70)	(0.30)	138	石 鉄		H 2	17.00	10.15	3.45	0.40

第2表 石器計測表

()は測定でないもの

VI 総 括

1. 遺構について

本遺跡では、A地区において3基、B地区において4基、合計7基の配石遺構が確認されている。

① A地区配石遺構

全部で3基確認されている。はじめに本配石群を平面形状からみて分析すると、第1号配石、第2号配石と第3号配石は中間に空白部分をはさみ両者を別のグループとしてとらえることができる。さらにこの2つのグループのうち第1号配石と第2号配石のグループは、配石に使用されている礫の大きさの違いから2単位とみられ、本調査区内において確認された配石は2グループ、3単位とみることができる。次に時期的なものに目を向けると、本配石では時期決定に重要な役割を果たす、遺構伴出遺物とくに土器は各配石とも小破片のうきわめて微量であった。それらは縄文時代中期後半の曾利式、加曾利式土器の中で古手のものに含まれるものであった。いずれにしても、縄文時代中期後半のこの時期以後に配石遺構が構築されたものと思われる。最後に本配石遺構の性格について考えてみる。本配石遺構は、その特徴として①配石内の礫中に石皿、打製石斧などの石器を伴出させる。②土壌をもたない。ということがいえる。①については滝戸遺跡（富士宮市教育委員会 1977、1978、1980）で小単位配石内における伴出石器のセットという形で解釈されているが、本配石の場合がそれと同様のものか、そうでないものかは、検出面がわずかで飛躍することはできないが、石皿が配石遺跡の構築に使用される礫の一部として使用されるものである可能性が強いものに思えた。②の土壌をもたないという特徴は、従来配石遺構が墓地説、祭祀場説という2つの解釈が有力とされてきたことと切り離すことができないものである。本地域でも配石に土壌を伴う滝戸遺跡、富士市天間沢遺跡（富士市教育委員会 1979）、巨大な帯状列石で知られ祭祀遺構であることが予想されている千居遺跡（加藤学園考古学研究所 1975）、などがあり、いずれも、墓地説、祭祀場説を裏付ける有力な手がかりを有している。本遺跡の場合はこれらの既知の遺跡とは異なり類例をもたないものだとはいえる。しかし、再三いうように、本配石が一部発掘のため、その全体像を把握していない状況にあるので、今後の調査や広く類例を求めることにより検討していきたい。

② B地区配石遺構

第1、2、4号配石は、上部配石と下部土壌の組み合わせにより構築されている。とくに第1、4号配石は土壌内に埋壘をもつものであった。上部が配石で下部が土壌という形態は南関東から中部山岳地帯、東北地方にかけて確認されている配石墓に類似している。この配石墓は鈴木保彦氏の『関東、中部地方を中心とする配石墓の研究』（鈴木 1980）の中で紹介されているがそれらは後期以後に顕在化されたものであり、本配石の埋壘に使用された土器の時期である縄文時代中期末葉とは時期的な違いがあるように思われる。本地域で、配石墓の形態にちかいものの例としては滝戸遺跡の石囲い炉状石組とよばれる配石や、土底面に集石をもつものなどがあるが形状的にも違出し、時期的にも縄文時代中期中葉から後半にかけてのもので違いがある。

第3号配石は、円形で環状を呈し石棒を伴うものであった。環状の配石は本地域でも滝戸遺跡、

千居遺跡にみられる。また両遺跡においては石棒も検出されている。また2つの遺跡の配石遺構はいずれも縄文時代の中期のもので、本配石が後期の所産であることと、4個体4本の石棒をほぼ四方に配するといった特殊性から上記2遺跡の配石遺構と違った様相をもつものであると考えてよかものである。

本地区の配石は上述したとおり第1、2、4号配石は墓地として、第3号配石は祭祀場としての機能をもつものである可能性が強いものとして把握できた。しかしここでも遺跡の一部を確認したにすぎない状況が性格分析をより確実なものとして捉えることを困難にしている、今後配石遺構の性格の解明については、集落と墓域、聖域との関係といった問題を含め検討課題としてゆきたい。

2. 遺物について

調査により出土した遺物は土器、石器あわせて4,527点であった。うち土器は4,227点で石器は300点であった土器は縄文時代早(?)、前期、中期、後期にわたるものが検出された。縄文時代早(?)、前期は第1群土器、中期前半は第2群土器として分類し中期後半を第3群土器後期のものを第4群土器としたが、出土土器の9割以上を占める第3群土器について時代的なものをもうすこし詳しくみてみると、第1類は主として曾利系の土器に類似するものである。A-1、A-2は曾利Ⅰ式土器あるいはその直前のものを含むもの、B-1は曾利Ⅰ・Ⅱ式B-2、B-3、B-4は曾利Ⅱ式に比定でき得るものであろう。C-1は曾利Ⅲ式、C-3は加曾利EⅡの色彩を取り入れたものD-1～3は曾利Ⅳ～Ⅴ式に比定できうるものであろう。第2類は主に加曾利E式土器として捉えられているものの範疇に含まれるものでA-1～5は加曾利EⅠ、EⅡ、EⅢ式土器の、B-1～8は加曾利EⅣ式土器と類似するものである。

以上本遺跡から出土する土器は縄文時代中期末葉を中心としたものがそのほとんどであるといえる。

3. まとめ

本遺跡は前述したように調査対象地が限定されていることから遺跡の性格を論ずるまでには至らなかった。しかし、A地区、B地区において確認されたそれぞれ時期形態の異なる配石遺構と検出された遺物により数時期にわたり集落が経営されていたことをうかがうことができる。富士宮市遺跡地名表(富士宮市教育委員会 1979)によれば本遺跡が縄文時代中～後期の遺跡とされてきたが、今回の調査で早(?)、前期をも含め、本地域における有力な歴代遺跡であることが判明した。

この調査により得られた成果は多大なものであったが、それが必ずしも本遺跡を含めた、遺跡周辺の古代社会の解明に結びつくとはいいいがたいものであった。今後の成果の積み重ねをまちたい。

引用参考文献

加藤学園考古研究所 1975 『千厩』

鈴木保彦 1980 「関東・中部地方を中心とする配石墓の研究」 神奈川考古同人会 『神奈川考古第9号』

富士市教育委員会 1979 『天間沢遺跡第7次（F地区）発掘調査概報』

富士宮市教育委員会 1977・1978・1980 『滝戸遺跡発掘調査第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ次概報』

富士宮市教育委員会 1979 『富士宮市遺跡地名表』

圖 版

図版第 1



A 航空写真



B A地区前景

図版第 2



A A地区遺構全景(1) (西側から)



B A地区遺構全景(2) (南側から)

图版第 3



A A地区第1号配石



B A地区第2号配石

図版第 4

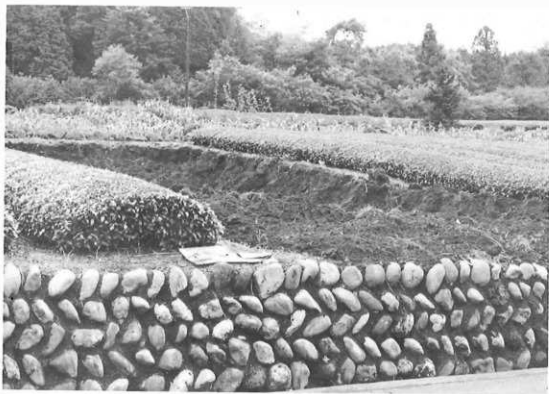


A A地区第3号配石



B 滝ノ上遺跡基本層序

図版第 5



A B地区前景



B B地区遺構全景

図版第 6



A B地区第1・4号配石（手前が第1号配石）

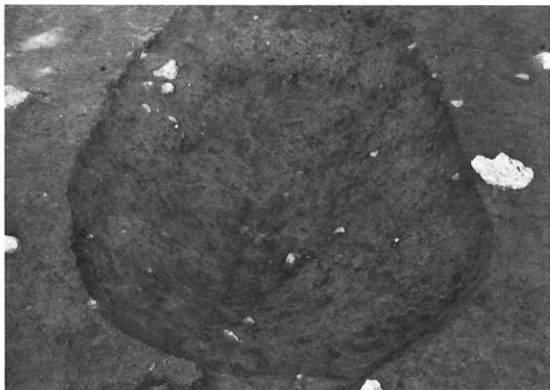


B B地区第1号配石軽石出土状況

图版第 7

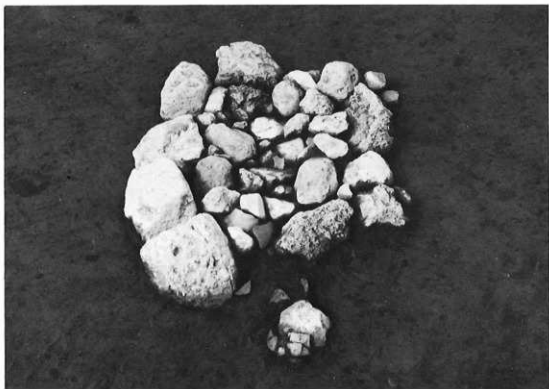


A B地区第1号配石埋墓出土状况



B B地区第1号配石完掘状况

图版第 8



A B地区第2号配石



B B地区第2号配石半掘状况

图版第 9



A B地区第2号配石完掘状况



B A-7区土器出土状况

図版第10



A B地区第3号配石(1) (北側から)



B B地区第3号配石(2) (南側から)

図版第11



A B地区第3号配石石棒 (No52) 出土状況

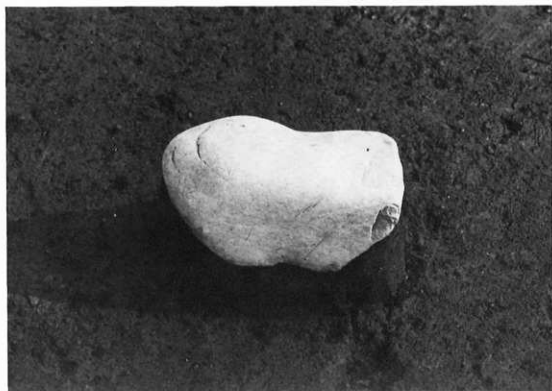


B B地区第3号配石石棒 (No55) 出土状況

图版第12



A B地区第3号配石凹石出土状况



B B地区第3号配石砥石出土状况

图版第13



A B地区第4号配石

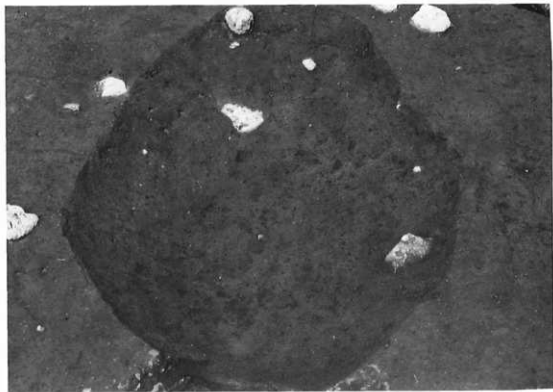


B B地区第4号配石半掘状况

图版第14



A B地区第4号配石埋甕出土状况



B B地区第4号配石完掘

図版第15



出土土器(1)

図版第16



出土土器(2)

图版第17

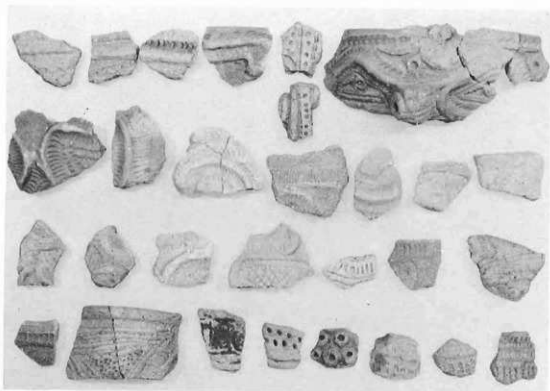


A 第1群土器



B 第2群土器①

図版第18



A 第2群土器②



B 第3群土器①

図版第19



A 第3群土器②



B 第3群土器③

图版第20



A 第3群土器④

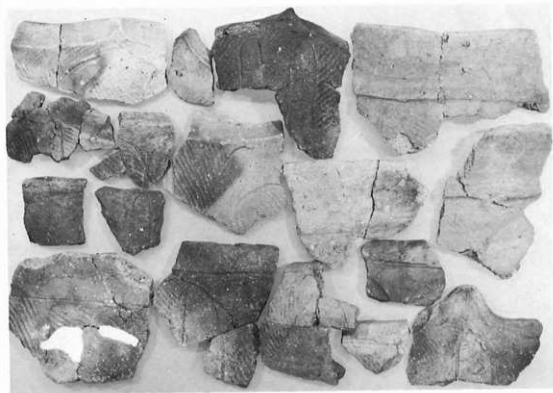


B 第3群土器⑤

図版第21



A 第3群土器⑥



B 第3群土器⑦

図版第22



A 第3群土器⑧



B 第4群土器

図版第23

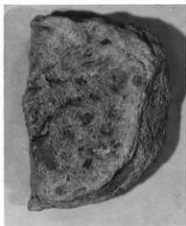


A 把手①



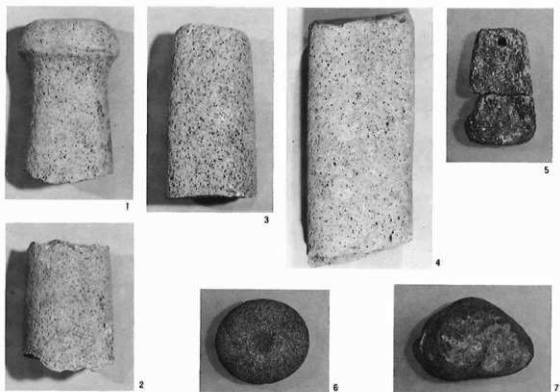
B 把手②

図版第24



出土石器① (石皿1~5、砥石6、7)

図版第25



A 出土石器②(石棒1~4、軽石5、凹石6、7)

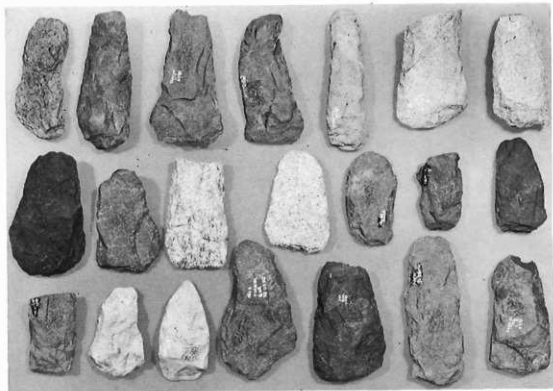


B 出土石器③(石鏃)

図版第26



A 出土石器④(石鏃)



B 出土石器⑤(打製石斧)

図版第27



A 出土石器⑥(打製石斧)



B 出土石器⑦(磨製石斧・石匙・石錐・磨石)

滝ノ上遺跡

— 泉宮畑地帯総合土地改良事業富士根地区
幹線第2号道路建設に伴う発掘調査報告 —

昭和56年3月31日

編集 富士宮市教育委員会

発行 静岡県清水土地改良事務所

富士宮市教育委員会

印刷所 篠原印刷